

邪神に転生したら配下の魔王軍が  
さっそく滅亡しそうなんだが、  
どうすればいいんだろうか？

# 登場人物紹介

Main Characters

リ・グダン

ゴブリンシャーマン族。  
ドラクウの命を狙う。

パルミナ

シェイプシフターの魔王。  
通称〈淫妖姫〉。

ドラクウ

魔王の一人。  
通称〈廃太子〉。軍略の天才  
とされている。

ひらのほんた  
平乃凡太

元サラリーマン。  
転生して異世界の邪神になる。  
碁が得意。

オイレンシュピーゲル

人界の神。  
ヒラノに頼みごとをしに  
魔界へ来た。

エリィナ

ドラクウの義妹で、  
邪神官を務める。  
素直で純真。

よしながさおり  
慶永佐織

ヒラノの高校の先輩。  
異世界ですでに  
神をしていた。

	目次	
	序	7
	第一章	迷惑な預かりもの 15
	第二章	風をまとう少女 90
	第三章	風の神 157
	第四章	シェイプシフターの呪い 184
	第五章	決戦 243



## 序

物思いに耽る時、〈北の霸王〉——ザイディシユはこの部屋に籠る。

黒い。壁も、床も、天井までも、全てが一様に黒かった。冥府の深淵から闇を切り出してきたような部屋は、この世の栄華を極めた彼にとつて、実に心地がよい。

この部屋を設計した者は、どういう意図でこのような配色にしたのか。

威圧感、孤独感、全能感。

全てが正解で、全てが誤っているようにも思える。

魔都にそびえる大魔城の奥深く、黒曜の間で〈北の霸王〉は倦怠を愉しんでいた。

ここは魔界。魔族たちの領域だった。

かつては、この大魔城に住まう大魔王が統治し、四天王が大魔王府の役人とともにその補佐をしていた。

その四天王の一人にして、筆頭が〈北の霸王〉である。彼は大魔王が崩御した時、ある動きに出た。

大魔王の継承権があるのは二人。大魔王の直系の孫であり、既に〈皇太子〉として立っていたド

ラクウと、母方の祖父が大魔王という形で血を引く女系のレニスだった。

ザーディシユは、ドラクウを廃位させ境界に追いやり、レニスを担ぎ上げて新しく〈皇太子〉に据えたのだ。

四天王の任免権を持つのも、命令できるのも、大魔王ただ一人。しかし、今その地位は空席で、未来の大魔王はザーディシユの手中にある。

さらに、彼は二十四万の私兵を有している。魔界において、これは圧倒的な兵力だった。

大魔王亡き今、中央の支配は弱まり、数多の魔王が割拠しているが、政治的にも軍事的にも彼に對抗できる者はいなかった。

現時点において、魔界の最高権力者は彼と言って過言ではない。

ザーディシユがいる「黒曜の間」は、四天王の一人に与えられる部屋の一つだった。ザーディシユが霸王位に就いた時から、この部屋の主は彼一人だった。以前は任地である北にすることが多かったが、最近は何かと理由を付けては魔都に戻り、この部屋で孤独を待らせている。

自らを、老いたとは思わない。

魔界の支配種族とも言えるトロール属の最大の特徴は、長命と不老だ。そのトロール属であるザーディシユの肉体も七十三という歳を重ねてなお、鋼並みの強靭さを保っていた。浅黒い肌、錆色の髪、黒曜の角。細身だが、弱々しさは全く感じられない。自らの武人としての風体を、〈北の霸王〉は誇りにしている。

今すぐにも大軍に号令をくだし、戦野を駆け抜ける自信がある。その自信こそが活力の源であり、汲めども尽きぬ活力こそが、威信の礎であった。

戯れに、天井に向けて手を伸ばす。

そこには、魔界の全図が彫られており、主だった城市の位置には大粒の金剛石が象嵌されている。天下。世界。

呼び方はともかく、生ある者がおよそ望み得る最大のものが、ザーディシユの掌に収まっているのだ。

嵌め込まれた石の一つ一つは城市であると共に、そこに住む数万の民を表してもいる。彼らの生殺与奪の権を邪神ならぬ我が手が握っている。ただそのことに対し、ザーディシユは無感動だった。

「こちらにおられましたか」

闇が揺らぐ。

漆黒に満ちたこの間に不似合いな、白。

〈北の霸王〉ザーディシユの懐刀として知られる、〈白髪姫〉ラコイト・デル・アーダだ。

「ラコイトか。何か、あったか」

「いえ、特には。北から戻られた、と伺いましたのでご挨拶に」

ラコイトは、トロール属とオーク族のハーフだった。

ザーディシユも長身だが、ラコイトは女だてらに彼よりも少し背が高い。字の通り白に近い銀髪を長く伸ばしたその姿は、見る者の目を奪う。さらに、少し広めの額と眼鏡が彼女を知的に見せていた。彼女が率いる官僚団からの人気も高い。

もちろん、美しいだけでザーディシユの懐刀は務まらない。才色兼備の誉れは誇張ではなかった。任地と魔都とを行き来するザーディシユの二重生活は、本来であれば大変な激務だ。だが、ラコイトが魔都で大魔王府に睨みを利かせているおかげで、彼はその分の時間を自分の謀に費やすことができる。

「苦勞を掛けるな、ラコイトよ」

「それは勿体なきお言葉。主の望むところを十全に叶えるのが臣下の使命です。しかし、そろそろ次の大魔王を即位させていたいただきたい」

国——魔界が、持たなくなっている。ラコイトは言外にそう訴えていた。

広大な国土、膨大な人口、莫大な富。それら全てが、大魔王という一人の魔族を中心にして渦巻くように存在する。それが、魔界のあり方だった。中心のない渦は存在しない。このままでは、魔界は完全に分裂しかねない。

「〈皇太子〉を、か」

「はい。お飾りの大魔王でも、いないよりはいる方が」

大魔王の擁立は、いつでも可能だ。それだけの力が、ザーディシユの陣営にはある。むしろ、ザーディシユ以外の者にはそんなことは不可能だ。正当に与えられた権力、力で奪った権限、そして目に見えない影響力。魔都においてザーディシユに逆らえる者はない。

「時だ。時が満ちておらんよ」

「そうでしょうか。大魔王府の連中も一部が頑張っているようですが、その声は弱々しくなってます

ています。羽虫の声を妨げに巨竜が道行きを躊躇う必要はないでしょう」

〈魔太子〉ドラクウの廃位は成功したが、大魔王府の文官たちは頭が固い。女系である〈皇太子〉レニスの即位には二の足を踏んでいる。

ラコイトの苛立ちには、文官たちの煮え切らない態度に向けられている。ドラクウを除いた時点で、レニスを立てねばならないことは分かり切っていたはずなのだ。

もちろん、そのことに気付かぬほど、文官たちも近視眼的ではない。

つまり、これは政治だった。

レニスが女系であることを理由に支持を渋ることで、今や魔都の実質的な支配者である〈北の霸王〉から何かしらの譲歩を引き出すとする浅ましい保身術なのだ。

男系の王統が絶えたことは、何度もある。その度に史書をいじり、正統性を喧伝してきたのもまた、大魔王府だった。今更前例をひとつ加えることに、躊躇いなどあるはずがない。

ラコイトの憤りが、ザーディシユには痛いほど理解できる。

しかし、今抱えている問題の核心はそれではない。

「群臣など捨ておけ。儂の懸念は、他にある」

「では、賊ですか」

魔都周辺の賊の跋扈は、目に余るものがある。原因は、税だ。

魔都周辺の民が、限界まで税を搾り取られることに耐えられなくなり、次々と賊に墮ちているのだ。それというのも、大魔王直轄領の税が魔都まで届かなくなっており、そのしわ寄せが彼らに向

けられていたためである。

各地に散らばる大魔王直轄領の税は、近隣の魔王たちに奪われていた。直轄領の代官自身が、身の安全を図るため自主的に税を彼らに献納している例すらある。

大魔王がいけないことが、このようなところにも影響を及ぼしていた。

「賊は確かに問題ではあるが、違う」

「群臣でも賊でもない。となると〈蝗帝〉か夜魔族、ですか」

「それこそ問題にもならない」

「では一体、何がお気に召さないので？」

「〈廃太子〉、だ」

南に放逐した〈廃太子〉が、魔界南西にある辺境の城市、アルナハを得ていた。

ただ得た、というだけではない。アルナハに拠っていたゴブリンの魔王ベナンを討つての、正式な支配だ。

あれだけの大敗から、普通はすぐに立ち直れるものではない。ザーディシユは、ドラクウがそのまま倒れると予想していた。敗残の貴種など、在野の将にとっては格好の手柄首だ。首級を挙げた小豪族に、ちよつとした恩典と差し障りのない役職をくれてやる。その算段まで内心済ませていたというのに。

「〈千里眼〉のベナンの甥であるリ・グダンが復仇に動きましたが、引き分けたとことです。リ・グダンの裏で糸を引いたのは、あの〈淫妖姫〉・パルミナです」

「聞いている。邪神が顕現した、という噂もある」

「莫迦莫迦しいことです。神代でもないでしょうに」

「——ああ、そうだな」

笑みが零れそうになるのを、ザーディシユはこらえた。邪神は、いる。ザーディシユ自身のすぐ近くにも顕現しているのだ。黒い長髪の戦神。血塗られた最強の女神。

黒髪姫の素性は、秘中の秘だった。

ラコイトは、自分とあわせて〈黒白二姫〉と持て囃されている〈黒髪姫〉の正体が邪神だと思っすらいけないのだ。いずれは明かさねばならないだろうが、今はその時ではなかった。

「ともかく、大魔王の即位の件、ご一考をお願いいたします。私だけで支えるにも、限度がありますので」

「分かった。検討しよう」

言うべきことを言い終えると、〈白髪姫〉は去っていった。

ザーディシユは再び天井を仰ぎ、瞑目する。

大魔王。

そう、大魔王だ。

どうすべきか。

「〈廃太子〉・ドラクウ、か」

老いは、感じない。

いや、感じまいとしているだけなのだろうか。確かに疲れは抜けにくくなっている。自分で動くこともできるが、政治的に〈廢太子〉を抑えるには疾風迅雷の速さが必要だった。ここで力を使い果たすことになれば、いつかドラクウと戦場で見えた時に、後悔することになるかもしれない。

だから、ザーディシユは誰かに任せようを考えるようになっていた。これを老いと言うのであれば、〈北の霸王〉は老いたのかもしれない。

「……ベナンの甥を使うか」

南に、一石を投じる。それもなるべく、手間も金もかからない方法で。

答えは、意外にも簡単に見つかった。

「座輿にはなるだろう」

呟いて、ザーディシユは部屋を見渡す。黒曜の間は、いつも通り冷ややかな黒い輝きを湛えている。伝承によれば、数千年前に作られた時のままでという。

黒以外の四天王に与えられる部屋——赤、白、青。この中には主のない部屋も、一つある。そして、その部屋の主を任じる権限を持つ大魔王もいない。

「とはいえ、大魔城にいつまでも空き部屋があるのもよくはないからな」

誰に聞かれることもなく、霸王の呟きは黒曜の壁に吸い込まれていった。

## 第一章 迷惑な預りもの

### ▼▼▼【邪神】

それは、素麺だった。

冷たくてつるりと美味しい、日本の夏とは切っても切れない、あれである。冷やし中華も捨てがたいが、俺はこつちの方が安上がりで好きだ。

「ソウメン、召し上がらないのかしら？」

小首を傾げながら、〈賭博神〉フォン・マルクントは美味しそうに素麺を啜った。ガラスの鉢に、たつぷりの素麺。からり、と浮かべられた氷が揺れる。

転生して、邪神になって、なんで素麺を食べているのか。自分でも理解に苦しむ。

風鈴の音、扇風機、蚊取り線香。

畳敷きに、卓袱台。濡れ縁から見える前栽には美しい朝顔が咲き誇っている。

これは、夏だ。日本の。

なのに、不快な暑さを感じない。それは俺が邪神だからだ。



暑さ、寒さ、空腹、眠さ。もろもろ全てを、俺は転生の時になくしてしまっただけ。

「神さまになると、不便がないからつまりませんわね」

「はあ、そんなもんですかね」

「おかしいものでしょう？ あんなに嫌いだった夏の暑さを、ときどき懐かしく思ってしまう。それでこんな部屋を設えさせましたの。せめて雰囲気だけでも味わおうと」

神界で賭場のチェーンを経営しているマルクント嬢。俺は彼女の別宅の一つにある、朱夏の間、一人で招かれていた。

素麺を吸った。口の中に懐かしい出汁の味が広がる。涼やかな麺の食感が心地よい。気が付けば、三口四口と口に運んでいた。

「食べながら、お聞きなさい」

うちわを扇ぎながら黄昏るマルクントは、浴衣姿だ。金髪美少女にも浴衣はよく似合う。濃紺の生地、淡い紫の朝顔が一輪。襟元からのぞく肌の白さが眩しい。

「——貴方、随分と下界で好き勝手やっているようですわね」

単刀直入だった。

素麺を嘔き出しそうになるくらい驚いたが、鍛え抜かれた自制心のおかげで表には出なかつた。マルクントの蒼く冷たい視線は、射抜くように俺を見つめている。

リ・グダンとの戦いから、約一ヶ月が経っていた。

確かに、俺は邪神としての領分を超えて下界で好き勝手にやっている、と思う。ドラクウと共に

歩む。その約束を果たすため、道理には少し引っ込んでもらっていた。

「ほとんど常時顕現して、姿も見られ放題。落雷をはじめとした奇蹟も躊躇いなく使う。はっきり言って、傍若無人な振る舞いですわね」

「仰る通りで」

こういう時に下手な言い訳はしない方がいい。実際にやっていることなのだし。

でも、譲るつもりはない。俺は、ドラクウを見守ると決めたのだ。

それに、多分マルクントは本気で怒っていないのだらう。今、彼女の視線は俺から外れ、庭の朝顔に向けられている。口調も穏やかだ。こちらの反応を愉しんでいる気配さえある。これは、交渉の下拵えに違いない。

「本来であれば、何らかのペナルティを科すべきなのでしょうね」

「神が神を裁く、ということですか」

「神も邪神も、複数いれば社会になります。気まずい思いをしないためのルールは必要でしょう。

あなたはその辺りに随分と無頓着なようですけれど」

「あの慶永さんの関係者ですから」

俺の属神ということになっている慶永さんとは、前世からの付き合いである。高校で俺の一つ上の先輩だった彼女は、豪放磊落で天衣無縫、堅苦しいことが大嫌いな女神だ。

その薫陶を受けた俺がルールを大人しく遵守するかどうか。当の慶永さんと因縁のあるマルクントに分らないはずがない。

「——そう言われてしまうと何も言えなくなるのが、辛いところですね」

ただ、今の俺の行動は慶永さんの方針によるものではない。慶永さんは、俺がドラクウの前に姿を現したり、必要以上に関わったりすることをむしろ嫌っていた。軽々しく奇蹟を使うなんて言うまでもなく、特に前世で得た知識の伝授については厳禁されている。

詮索はしないが、何か理由があるのだろうか。

とはいえ、俺が規則を逸脱してでも自分が正しいと思うことをしようとするのは、慶永さん譲りの考え方であるの間違いない。前世で一緒に過ごした高校時代の一年間、慶永さんには色々教えてもらったものである。

「それはともかくとして、私は貴方に一つ貸しがあります。覚えていますか、ヒラノ」

「……賭け碁の件、ですよね」

「ええ。その貸しを、早速ですが清算しようと思うのです」

借りを返せ、と来ましたか。先にこっちがまずいことをしているというのを指摘したのも、このための布石か。どんな難題を押し付けられることやら。マルクントが自分の苦手な慶永さんを同席させず、俺だけ呼び出したのも、慶永さんなら拒絶しかねない内容だからだろう。

「内容にもよりますね」

「選り好み、できる立場だと思いませんか？」

「少初位の身の上です。できること、できないことがありますからね」

俺の答えに、マルクントはやわらかく微笑んだ。

切り返しは合格、らしい。安請け合いです。奴には任せられない仕事なのだろうか。となると、ますます難易度が高いような気がする。

「そういうところ、嫌いではありませんよ」

「それはありがたいお話です」

「貴方がヨシナガの一派でなければ、私の部下に迎えたいくらい」

「それはご容赦願います。慶永さんが聞いたら冗談では済まない」

「あら、大した自信。私の知る限り、ヨシナガはよほど気に入った神やものでないと執着しない性分だと思えましたわ」

「こう見えて、前世からの仲ですからね」

とつさに微笑み返す。そうしたのは、マルクントの目を直接見ないためである。宝石のような青い瞳が再びこちらに向けられたのだ。

会話を愉しんでいるだけではない。明らかにこちらの力量を測っている。

このクリステイナー・フォン・マルクントという人物、見た目はただの美少女だが、中身は相当な狸だ。隙を見せると後ろからバツサリ斬られそうな凄味がある。

迂闊な答え一つで弱みを握られることにもなりかねない。慎重に、でも軽妙に。言質を取られないように言葉を選びながら、相手の言葉の白刃を躲かしていかねばならない。

「前世からの仲故に大切なのであって、それ以上ではない、と。もう少し掘り下げて聞いてみたいところですが、まあ、そういうことにおきましようか。ところで」

来たぞ、本題だ。居住まいを正し、マルクントに向き直る。

「はい、何でしょう」

「貴方あなたにお願いしたいのは、この子です——」

「……それで、預かってきた、と」

「はい」

慶永さんに、俺は正座させられている。アルナハにある、俺のための邪神殿の一番奥で、だ。恥ずかしい。エリイナたち邪神官は、見て見ぬふりをしてきているが、ときどき肩が震えているのが分かる。絶対、笑っているに違いない。頑かたくなに顕現けんげんしない慶永さんのせいで、俺は誰もいないところに向かってペコペコしているようにしか見えないだろう。それは確かに滑稽こっけいだ。

「しかし、〈賭博神〉が、ね」

慶永さんが呟つぶやく。その視線の先には、居心地悪そうに少年が座っている。

灰色の髪に青い瞳ひとま。年の頃は十四五。まるで執事しつじのような服に身を包んでいる。何とも陰気な顔をした少年だ。

彼が、マルクントからの「預かりもの」の正体だった。

「神さまを預かってくる、なんて前代未聞だよ？ それも格上の」

「それを言ったら、今の俺より格下な神さまなんてほとんどいませんよ」

「開き直るなよ、みっともない。と、そんなことより君だ」



「え、あ、僕ですか」

「そう、君だ。オイレンシュピーゲル」

ティル・オイレンシュピーゲル。この少年神を預かり、その願いを叶えることが、俺の借りをチャラにする方法だった。

「「賭博神」が君をマスターに預けたということは、何かしらの問題を抱えているんだろう？」

さすが慶永さん。回りくどい聞き方は一切しない。

オイレンシュピーゲルは、助けを求めるように視線をこちらに向ける。が、俺は小さく首を振った。この少年がどんな問題を抱えているかは、俺としても知っておかなければならない。

「えっと、あの、僕ですね、ワーボルトという土地で神さまをしているんですが」

「ほほう」

ワーボルトは、確かジョナンの赤い森の西、川を越えた、魔界の外の地名だ。ドラクウの支配地域に隣接していると言えなくもない。ジョナンの赤い森の神であるジョナン翁のアドバイスもあるので、いずれは接触しなければいけないと思っていた土地だが、一つ大きな問題がある。そこに住んでいるのは魔族ではなく、人族なのだ。俺はまだ転生してから、人族というのを見たことがない。何か頼まれたとして、手助けすることができのさだろうか。

「実はその、言いにくいんですが……」

「うん、何を手伝って欲しいんだ？」

無理難題は承知の上だ。あのフォン・マルクントが楽な仕事を寄越すはずはない。

上目遣いにオイレンシュピーゲルがこちらを見る。

「……魔族に、攻めてきてもらいたいです」

### ▽▽▽【魔王】

槌の音が響いている。

アルナハの城壁は、以前よりも大幅に拡張されつつあった。

魔界において、城市とは城壁に囲まれた領域のことであり、アルナハの市街もまた、壁に囲まれている。城壁の範囲を広げなければアルナハの成長はない。ドラクウと文官筆頭のラ・バナンはそう考えていた。それゆえの拡張である。

「アルナハを訪れる行商人の数はさらに増えております。それに、民も」

「これまでの方法ではいくら広くしても収容しきれない、ということか」

「市場の広さの問題だけではありません。出店場所を巡る些細な交渉の行き違いで、行商人同士が衝突する事例が増えているようです。商いを円滑にするには、裁定を行う人間を置く必要があります。ましよう」

「お前にその権限を与える、というわけにはいかないのか」

「恐れながら、既に私の手に余る状況になっています」

文官として優秀なラ・バナンの仕事は、日に日に増えていた。アルナハ政庁の文官といっても、字さえ読めれば採用しているような有り様だ。できる者のところに仕事が集まってしまうのも、必然だろう。ドラクウとしても改めなければならぬと思うのだが、ラ・バナンか自分が処理してしまおう方が速さも正確さも上なのだ。

全ての方面で、人材が不足している。

ドラクウは、先の戦いでゴプリンシャーマンのリ・グダンに敗北を喫した。実際に敗北したのは敵が呼んだ白狼の邪神に対してとはいえ、負けは負けだ。だが、あの戦いの結果は、民には違っていないというらしい。勝利とは言わないまでも、アルナハに被害を受けることなく、敵の攻勢を頓挫させたという見方だ。

それは、ある意味では正しい。

南の沼沢地にいる巨大な甲殻類の魔族である〈堅き者〉との盟約も、いい材料だ。部下のルクシユナが、〈堅き者〉たちとの同盟を結ぶことに成功したおかげで、後背を気にせずすんだ。

しかも、ドラクウが税制を改め、治安に気を配っていることで、アルナハはこの周辺では比較的安定しつつある。

目聡い行商人たちがこの城市に目を付けるのも、無理はない。周辺に溢れる、土地を捨てた民たちも流入し、アルナハは俄かに活気づいていた。だが、人が増えれば争い事も増える。それをうまく差配する人材が、足りないのだ。

文官だけでない。武官も、兵も、何もかもが足りない。〈青〉のダッダ——全身に青い染料を

浴び、それが取れなくなったため、こう呼ばれるようになった——をはじめとした人熊を臣下に迎えてなお、兵力は四〇〇〇と数百しかない。これでは、軍を発した時、留守のアルナハを守る兵を確保するのも苦勞するだろう。

勢力の成長の速さに、人材の獲得がまるで追いついていないのだ。

「ラ・バナンの方に人材の当てはないのか」

ドラクウが訊ねる。

「父の頃の旧臣団には、もう」

ラ・バナンの父は、以前アルナハを支配していた魔王ベナンだった。ラ・バナンは父の旧臣たちに声をかけたが、色よい返事は来ていない。

「他でもいい。質が悪いのも困るが、今は数が必要だ」

「それでしたら、ドラクウ様の方が」

「ああ、そうだな。手は、打ってはいるのだが」

魔都からドラクウの旧臣——大魔王府の役人を呼ぶことは、考えていた。既に手紙も送っている。

だが、応じる者がいるかどうかは不透明だった。

城市を一つ手に入れたとはいえ、今のドラクウは辺境に割拠する魔王の一人に過ぎない。将来のことを考えれば、〈魔太子〉ドラクウよりも〈北の霸王〉ザーディシュの陣営に与しておいた方がいいと考える者は多いはずだ。

それに、魔界全土を差配していた官僚にとって辺境の一城市では、仕事の間尺が違い過ぎるだろう。ドラクウはこちらも遣り甲斐のある仕事だと感じているが、権門志向が強く先例を重んじる魔都の旧臣たちの中で同じように感じる者は少ないに違いない。

果たして、誰か一人でもこちらに来てくれるだろうか。期待はできない。大魔王府の役人たちはあくまでも大魔王に仕えるのが仕事だ。先の大魔王が崩御した時に「北の霸王」に唆されてドラクウの即位に反対した者も多い。

今はただ、自分に付いてきてくれる者を信じてやっていくしかないだろう。

それに、良い面もある。家臣団での序列だ。古い家臣と新しい家臣の対立は、どれほど気を配っても避けられるものではない。旧臣を頼るやり方より、全て新規に召し抱える方が家臣団でのわけがまわりも少なく済むはずだ。

ドラクウがため息をついた。

「地道に探すしかないか。この際だ、行商人や市井の者からも取り立てねば」

「ほう。出自を問わないのでしたら、私に心当たりがあります」

翌日、ラ・バナンは早速一人の男を連れてきた。

アルナハの政庁で、ドラクウはラ・バナンの推挙したこの人物と面談をした。

「豚、ですな」

男は開口一番、そう答えた。増え続けるアルナハの民を養うために何が必要かという問いに対し

てだ。

クオン・ヴェルバニアス。ラ・バナンが見つけてきた、コボルトの冒険商人だった。元、と言った方がいいかもしれない。コボルトは、成長が早く、寿命が短い。彼は四〇で、もう老境に差し掛かっていた。アルナハを中心に西や北へと隊商を率いてきたが、その財を息子に譲り渡しての仕官だった。

「豚は既にアルナハでも飼っている。あれはあれで旨いな」

ドラクウは答えながら、豚肉の味を思い出していた。魔都のある北の地方では、豚よりも羊の肉が上等とされる。ドラクウ自身、羊以外の肉を食べたのは「北の霸王」に敗れて以降のことだった。「数を、もつと飼えばよろしい。これからアルナハの人口は増えます。食べられるものは多ければ多い方が結構かと」

「飼うと言うが、城市の中は手狭だ。豚に割くだけの広さはあるまい」

市場の場所にも事欠いているのだ。とてもではないが、豚を飼うほどの土地はない。

「そこで、森の恵みを使うのです」

冒険商人だったクオンは、「渡河者」でもある。魔界と人界を隔てる河を渡り、人の世界を見てきた。魔界にしかないもの、逆に人界にしかないもの。それらを商うのは、胆力は要るが実入りも大きい。

「渡河者」は、人の世界を見ているだけに見聞もまた、広がった。

「人族は、森に豚を放します。森の恵みを食べて豚は育ちます。肉質も良い」

「それで、管理はどうする」

「しません。村々で放し飼いにされた豚は、共有の財産です。秋になれば絞め、肉にする。燻製にして冬の食糧とするのです」

「アルナハに冬はないぞ」

「それはまさに好都合ではありませんか。必要な時に、必要なだけ獲ればいい」

なるほど、見聞が広いのは確かかなようだった。まだ計画としては雑だが、その辺りはラ・バナンに諮って追々詰めれば良い。

犬が立ったような見かけのコボルトは、弱々しい魔族として知られている。だがこのクオンは少し毛色が違うようだ。うまく使えば化けるかもしれない、とドラクウは考えた。

「クオン・ヴェルバニアスと言ったか。商人として功績があるそうだな。文官として、その力を發揮してもらおう」

「お待ちください、ドラクウ様。私は、文官としてではなく、武官として遇していただきたいのです」

雲行きが怪しくなってきた。武官も欲しいが、今は文官の不足の方が深刻だ。クオンのように現場に即した知恵が出せ、さらに計数にも強い人材は、絶対に召し抱えるべきところではある。だが、武官の志望とはどうということなのだろうか。

「武官、と。軍での経験はあるのか？」

「若い頃、軍役に」

「では指揮の経験は？」

「ありません」

「……それでは武官というのは難しい」

「自信が、あります」

クオンの目はまっすぐだ。

コボルト属の中でも小柄で非力なヨーク氏族に属する老人を、どう遇するか。悩みどころではある。今は、一人でも多く文官が欲しい。しかし、進んで仕官しようという者の気持ちを挫くのも、本意ではない。

「無給でも、結構。武官の末席に加えてはいただけませんか」

無給とはまた意外な申し出だ。冒険商人としての蓄えがあるのだろうか、それを吐き出しながら暮らすにも限度があるだろう。何よりも、他の家臣への示しが見つからない。

「そういうわけにもいくまい」

「ではせめて、訓練の指図などをさせてください」

熱意がある。小柄な身体付きだが、それが伝わってくる、良い目をしていた。ここまでの訴えを、ドラクウは退けることができない。

「……分かった、クオン。お前を武官として召し抱えよう。ただし、条件がある」  
「何でしょうか」

「武官としての仕事が入っている時間は、文官の補佐をするように」

クオンが、跪く。

「心得ましてございます」

当たりもあれば、外れもあるのが世の常だ。

ドラクウはこの日、ラ・バナンの推挙によって参上した何人かと引見したが、召し抱えられる者と召し抱えられない者は半々といったところだった。ラ・バナナが、あえて取り交ぜて推薦している風でもあった。どういう人材を薦めるべきか、試行錯誤しているのかもしれない。

事実、ドラクウの趣味は変わっていた。クオンのように、少し尖った者を好む。

ありきたりな人材を取り揃えても、勝てない。そういう思いがドラクウを突き動かしている。

タイバンカにせよ、ルクシユナにせよ、ダツダにせよ、皆、尖っていた。もちろん、ラ・バナナも。こういう人材を適材適所で扱ってこそ王道だと、彼は思っている。

だが、本当に必要な人材には、なかなか巡り合えない。

人数だけは増える家臣団を見て、ドラクウは自分が焦っていることに気付いた。

情報。

武官でも文官でもなく、情報を扱う者が必要だった。アルナハという僻地に身を置きながらも、中央に通じる必要がある。そうしなければ、取り残されてしまうだろう。

例えば、ドラクウと敵対する〈淫妖姫〉パルミナは魔都に多くの間者を放ち、アルナハにほど近い城市であるパザンから動かずに、政争の機微を把握している。それと同じか、可能であればそれを上回る量の情報が、ドラクウには必要だった。

出会いはある晩、唐突に訪れた。

手酌で酒を飲むことが多くなっている。

肴は、月だ。たまに簡単な料理などを用意させる。アルナハの濁り酒を舐め、窓越しに月を眺めながら、ドラクウはこれからのことを考えていた。

自分のこと。家臣のこと。邪神のこと。そして、国のこと。

考えれば考えるほど、自分の中に焦りと無力感が募っていく。何故悩むのか、と莫迦莫迦しく思うこともあった。

なんなら、魔界を統一することを諦め、アルナハを治める魔王として自立するという道もある。

この城市を魔都から直接攻めるのは、非常に困難だ。軍を送るには遠過ぎる。その意味では、恵まれた立地とも言えた。

逆に言えば、ドラクウもまた魔都に遠いのだが。ドラクウがまだ魔都にいた頃、アルナハなど地図の端としてしか認識していなかった。

そんな場所から、天下を窺う。

やはり、辺境の一魔王で終わる気はない。

大それた野望だ。ドラクウに流れる大魔王の血のせい、と言えるかもしれない。それは誇りであり、立場であり、武器でもある。

国が、乱れていた。それを正すには、力だけでは足りない。もし力だけで収まるのであれば、



〈北の霸王〉ザーデイシユで事足りるのだ。

魔界は複雑で、混沌こんとんとしている。多くの民、多くの神、多くの習俗しゅうぞく、多くの伝説。大魔王家はそれを緩やかにまとめる要石かないしであり、なくてはならないものとして魔界に君臨してきた。それが最も正しい方法であるかは、ドラクウにも分からない。あるいは、全ての種族から立てた魔王による合議といった方法もあるのかもしれない。過去にそういう夢を追い求めた反逆者もいた。

だが、今求められているのは、大魔王による統治だ。

全く新しい形の統治に移る体力など、今の魔界には残されていない。長きにわたり慣れ親しまれてきた魔界の形に、戻す。それができるのは、ドラクウしかない。

大魔王家の血脈に連なる男子は、二人。一人はドラクウで、もう一人はその叔父だ。叔父は既に出家しているの、継承権はない。今〈皇太子〉を名乗っているレニスは、女系。つまり大魔王の血を男系で引き、継承権を持つのはドラクウだけだ。

ドラクウが大魔王に就かねば、魔界は瓦解がかいする。それがドラクウの戦う理由だ。酒を、注ぎ足した。

中心に大魔王がいて、その周りに諸部族がいる。それが、魔界という形になる。大魔王の不在こそが魔界を混乱させている原因だった。

力を蓄え、魔都に凱旋がいかんし、大魔王位に就く。それが、自分のなすべきことだとドラクウは考えていた。

その一方で、魔界が大きくうねり始めているのも、感じる。〈北の霸王〉ザーデイシユがいつまで経っても〈皇太子〉レニスを大魔王の座に就けないことで、魔界はかつての混沌こんとんに戻ろうとしている。

混沌は一時のことで、強さと知恵と勇気を備えた何者かが大魔王家に代わる新しいものを打ち立てるかもしれない。そういう者をこそ、民は待っているのかもしれない。

だとしたら、ドラクウのやっていることは、何になるのだろうか。

「浮かない顔をしておられますね」

どこから声を掛けられたのか、分からなかった。

右か、左か。油断なく手元に剣を引き寄せ、気配を探る。

「これは失礼を」

声の主は、意外なところから姿を現した。天井だ。青い肌、黒い目。ダークエルフと呼ばれる珍しい種族だった。かつて大魔城で見かけたことがある。

「ダークエルフ、か。余も会って話をするのは初めてだ」

「ご尊顔を拝し、恐悦きょうえつ至極しごくに存じます」

天井から軽業のようにおり立ったダークエルフは、膝を突いてドラクウに平伏する。その身のこなしは、何かの舞踊のように優雅だ。

「拙者、ダークエルフ族のシユノンと申す者。主上より命を賜りたく、参上いたしました」

「シユノン、か。祖父より名を聞いたことがある」

「有り難きお言葉。ただそれは、拙者の先代に当たるシユノンかと」

ドラクウには、主上という呼び方が気になった。本来は臣下が大魔王を呼ぶ時のみ使うことを許される尊称だ。

如何にドラクウが先代大魔王の孫であり、廃される前は皇太孫であったとしても、この呼びかけは不適切だった。口喧しい者であれば不敬と詰り、厳罰に処してもおかしくはない。

だが、ダークエルフというのは大魔王に仕える諸族の中でも特別な扱いを受けている。そもそも出自が魔界ではない。遙か西、人界の奥深くでエルフとの争いに敗れた者たちの末裔だ。

それを千数代前の大魔王が、拾った。

以来、彼らは大魔王に忠実に尽くす種族として知られている。その彼らが、大魔王に使うべき尊称をあえて他者に使うだろうか。

「シユノンよ、先ほどお前は余のことを『主上』と呼んだな」

「はい、恐れながら、そのように」

「何故だ」

「我らダークエルフの忠誠は、大魔王の血脈にこそ捧げられておりますれば」

「……答えになっていないぞ、シユノン」

言いながら、ドラクウは察していた。

つまりダークエルフは、ドラクウに賭けた、ということだろう。

「恐れながら主上。今や大魔王の血を引く正統な後継者は、主上を措いて他におられません。なれば、拙者が主上を主上と呼びすることに、なんの障害もございません」

「そうもいくまい。余は未だ即位しておらぬ」

「では、即位の意志はおあり、ということでしょうか」

ああ、なるほど。『主上』という呼びかけに応えるかどうかでそれを推し量る意味もあったのかと、ドラクウは自分の不明を恥じた。

確かに、〈北の霸王〉に対して大敗を喫して以降、ドラクウの野心は明らかにされていない。天下、という言葉部下や邪神に対して使いはしたが、それは内向きのことだ。外から見れば、怪しく動いているようにしか見えなかっただろう。

「ああ、その通りだ。余には社稷を継ぐ意志と覚悟、そして責任がある」

「それを聞いてこのシユノン、安心いたしました。主上、拙者たちの忠誠をお容れください」

「よかるう」

「有り難き幸せ」

仰々しく頷く。好機、というより他ない。ダークエルフは謀報に長け、大魔王の耳目として魔界の維持に貢献してきた種族だ。彼らを抱えることは、今後の大きな助けとなる。

「ではシユノン、早速だが、魔都の今の様子が知りたい」

「畏まりましてございます」

二人の密談は、夜遅くまで続いた。

アルナハには、まだまだ問題が山積している。

翌日も、書簡に目を通しながら、ドラクウは眉根を揉んだ。政治、行政、裁判、軍事。全てが発展の途中で、様々な葛藤を生みながら成長しつつある。ドラクウは、これらを裁定する時、勢いを削がないようにだけ注意を払っていた。

この城市だけの問題ではない。ダークエルフのシユノンに語ったように、天下を目指すのだ。であれば、この一市だけのことを考えた制度のあり方は避けるべきだった。

それは、信仰についても言える。

エリイナを邪神官長とする邪神殿の組織は、徐々に大きくなっていった。主祭神に、邪神ヒラノ。脇を固めるように、女神ヨシナガと邪神エドワードの撰社が並ぶ。エドワードは人熊の神だが、女神ヨシナガの名を、ドラクウは聞いたことがなかった。

ヒラノの妻のようなものかもしれない、と勝手に想像している。邪神とはいえ、男がいて、女がいる。そういう交わりもまた、当然あるだろう。あえて尋ねる非礼はしていないが、エリイナから二人のやり取りを聞くと、そういう間柄なのだろうと感じられた。

積極的に他の神も祀った方がいい、とエリイナには助言している。

辺境には、とにかく神が多い。辺境に数多く住んでいるゴブリンやコボルトが信心深く、色々な物事にそれぞれ邪神を置いたりするからだ。

苦々しい記憶と共に思い出されるあの白狼の邪神「オクリ神」も、ゴブリン属やコボルト属に広く信仰される「旅の安全を司る邪神」だという。中央に暮らし、天神地祇を祀る大魔王の係累であるドラクウでさえ、知らぬ神がいる。それは新鮮であると同時に、驚愕でもあった。

世界は、広い。

先日雇い入れたクオンによると、人族もまた、多くの神を祀るのだという。魔族と、人族。あわせて一体どれほどの神が、邪神が、いるのだろうか。名も知られず祀られることもない神もまた、多いのだろう。

そう考えると、自分があのヒラノという邪神に巡り合えたのは、一つの奇跡であるという想いが湧いてくる。魔族と共に歩む邪神。そんなものは、神話の中になしかな登場しない。

伝説では、最初の魔王と共に魔界を統一した邪神も、そういう存在だったらしい。

自分は奇貨に恵まれている。運命というものは嫌いだしたが、ありがたい、と思っている。報いたい、とも。それが邪神殿であり、信仰だった。

ヒラノの協力で「片頬」のル・ガンがドラクウ側に寝返った話、「青」のダツダが岩を斬った話は、伝説として広めさせるように既に指示を出している。

奇蹟というものは人の心を動かす。今はまだ小さな影響しかないだろうが、ドラクウが勢力を増せば、ヒラノへの信仰も集まるだろう。邪神が何を喜ぶのか、ドラクウには分からない。だが、それくらいしか感謝を表す方法を思いつかないのだ。

「義兄上、お疲れのようですね」

執務室に入ってきたのは、エリイナだった。手には、茶器の載った盆がある。干した果実も小皿に盛ってくる配慮が彼女らしい。疲れには甘いものが効く。邪神官長を任せているので忙しいはずだが、兄妹同然に育ったエリイナはドラクウを気遣ってか度々執務室を訪れていた。

「いやなに、これくらいは大したことはない」

「あまり、寝ておられないのではありませんか？」

「……うむ」

多忙、ではあった。能率が上がらないことは承知していたが、つい夜更かしをしてしまう。決裁しなければならぬことは、いくらでもあった。

「ラ・バナンの任せてしまえばよろしいのでは？」

「あれにも随分と仕事を任せている。これ以上はさすがに、な」

「義兄上が決裁するという形にしているから、増えている仕事もあるのではないだろうか。ラ・バナンの権限を与えてしまえば、減る仕事も出てくるはずです。義兄上に提出する書類は、ラ・バナンの全て一度目を通しているのですから」

「しかし、な」

「差し出がましいようですが、王とは上に立つものです。臣下に対して広い度量を持つことこそが王道の基礎ではございませんか」

「ああ、そうだなエリィナ」

幼い頃から聡明だと思っただけだが、邪神官長を任せてからの成長には目を見張るものがある。立場が人を作るということは実際にあるのだ。

指摘することも一理ある話で、早速、ラ・バナンの打ち合わせようとドラクウは考えた。

「ところで義兄上、一つ相談事が」

「なんだ、珍しい。ヒラノ様のことが」

「ええ。最近、少し悩んでおられるようです」

「悩む？ 邪神が、か」

「はい。最近迎えられた客人神についてのようなのです」

「ほう、邪神も悩むのだな」

邪神殿に、ヒラノが何処からか少年の神を連れてきた、とは聞いていた。そういうことが分かるというだけでも、これまでの常識から照らせば異常なのだが、ドラクウはあえて気にしないように努めている。邪神ヒラノと出会ってから、驚くことが多すぎる。

確か、オイレシユピーゲルという名の神だったはずだ。

「その神が、ヒラノ様を通じて義兄上に頼みたいことがある、と」

「余に？ まさか、竜を倒して宝剣を取り返せ、とでも言うのではあるまいな」

「そういう戯言であれば、まだ良かったかもしれせん」

「一体何だというのだ」

「——河を越え、人界へ侵攻せよ、と」

ううむ、とドラクウは唸った。

河を越えるというのは、クオンのような例外があるとはいえ、ほとんどの魔族にとつて想像の範囲外の行為だ。高い塔の上から飛び降りるとか、そういう類の暴挙と認識されている。しかも、軍を率いて侵攻するのだ。

「ヒラノ様は、何と？」

「反対されているようです。義兄上が折角アルナハで軍を養っている時に、無理はさせられないとお考えのようです。リ・グダンやパルミナに対する備えもありますし」

「ああ、その通りだ」

「しかし……」

「しかし？」

「ヨシナガ様は、賛成しておられるのです」

「何だと？ それは少し厄介だな」

エリイナから聞く限りでは、邪神ヒラノは女神ヨシナガの助言をよく聞くようだ。先ほど想像したように、夫婦であればそういう様子も容易に想像がつく。だが、ここでヨシナガの言葉にヒラノが折れたとしたら。信者である自分に、あの邪神の頼みを断り切ることができるのか。ドラクウは自問した。

パルミナは相変わらず何を考えているか分からない。リ・グダンは、ほとんど賊徒と化してアルナハとパザンの間を荒らしている。その二人と敵対しながら、まとまった戦力を西へ送ることは、どう考えても自殺行為に等しい。避けられるのなら、避けたい事態だ。

しかし、ドラクウの信じるあの邪神は、果たして女神ヨシナガの頼みを断ってくれるのだろうか。

「難しいな」

「ええ、とても」

自分が邪神に協力することで危険にさらすもの、失うかもしれないもの大半は、あの邪神の助力なしには得られなかったものだ。そのことについて、ドラクウは感謝の念を忘れたことはない。

であれば、ドラクウもまた邪神を助けるべきなのだろうか。邪神と魔族の関わりとして、何が正しく、何をなすべきなのか。

エリイナの淹れてくれた茶に、手を伸ばす。

冷めて渋みの出た茶を啜りながら、ドラクウはゆっくりと目を閉じた。

## ▼▼▼【邪神】

散歩をすることが多くなった。

邪神殿に、あまりいたくないのだ。俺のための建物なのにな、と呟きながら、アルナハの街をぶらぶらとろつづく。特に用事もないのでさすがに姿は見えなくしている。

初めてアルナハに来た時より、大通りを往く人の数は多くなった。道路を舗装するという考えがないからか、往來は土埃で凄いことになっているが、露店も出て活気に満ちている。物売りの声に思わず串焼きでも食べたくなるが、お供え物でないので食べられない。その辺が、不満である。

不満。

そう、不満なのだ。慶永さんは、オイレンシュピーゲルに随分と肩入れしている。理由は知らな

い。知りたくもない。ただ、あの慶永さんが俺に気を遣っていることが堪らなく悔しいのだ。

俺はドラクウに人界への侵攻を命じたり、お願いしたり、神託したりするつもりはない。慶永さんもそれを重々承知しているからか、面と向かつては俺に頼んでこない。

頼んでこないのだが、言葉の端々で俺に「決断」して欲しい、と訴えてくる。こんなことは今までに、前世での高校生活を含めてもなかった。慶永さんはいつも慶永さんで、こんな煮え切らないことをする人ではなかった。

なんでこんなに、辛くて、悔しくて、空しくて、腹が立つのか。ポンと一言、「やれ」と言ってくれば楽になる。言われた後で悩む方が、まだマシだ。

オイレンシュピーゲルは、追いつめられている。正確に言えば、「オイレンシュピーゲルたち」ということになるだろう。つまり、魔界から見ても西側、河向こうに当たるワーボルトとその周辺の土着の神々だ。

草原と丘陵が続く、のどかで牧歌的な場所らしいのだが、最近その住民たちの信仰が薄くなっているという。原因は、新しい信仰だ。

ワーボルトよりさらに西、人界の中心部から「聖堂」という宗教が入ってきているらしい。「聖堂」は一柱の神だけを崇める宗教で、他の神への信仰を一切認めない。まだそれほど流行っているわけでもないが、もしこの信仰が広まってしまうと、オイレンシュピーゲルたちは信仰と神階を失うことになる。

それを何とかしようとして、ワーボルトの神々は馴染みのマルクントにお願いしたらしい。ちなみに、賭け碁や格闘技の興業で俺とマルクントが関わりを持っていることは神界では意外と知られていた。

魔軍を呼んで、神の怒りだということにしたいそうさ。何とも姑息な手段である。信仰が弱まったことを理由に自分たちを苦しめようとする神を、人々はどう思うだろう。その辺についてオイレンシュピーゲルが考えているのかどうか、怪しい。むしろ、普通に考えればますます新しい信仰、つまりは「聖堂」とやりに奔る気がする。

そう言えば、慶永さんの様子がおかしくなったのは、「聖堂」という言葉を聞いてからだだった。それまではオイレンシュピーゲルのことを邪険に扱って、追い返そうとさえしていたのに、どういっわけか急に親身になって相談に乗ったり、詳しい状況を聞き出そうとするようになった。

もしかして、俺と再会する前、人界で神をやっていた時、慶永さんは「聖堂」と何かあったのかもしれない。いや、あの様子を見る限り、何かしらの関係はあったのだろう。おそらく、ほとんど間違いのないと思う。

それなら言ってくればいいのだ、俺に。昔みたいに「ヒラボン、聖堂、ってやつが目障りだ。一緒にぶっ潰そう」と言ってくれば、すつきりするの。その願いを俺だけで叶えることはできないかもしれないけれど、一緒に悩むことはできるはずだ。

一緒に悩むことさえ拒否されてしまったら、俺は。気が付けば露店の連なりが途切れ、目の前には高い城壁がそびえていた。考えごとをしながら歩

いているうちに、いつの間にか、城壁近くまで歩いてきたようだ。

そのまま引き返そうとしたが、足取りはさっきよりもずっと重たい。邪神殿に帰りたくないのだ。飛び上がり、城壁の外に出る。確かこの近くで新しく集まった兵の訓練をしているはずだ。

× × ×

「訓練は、うまいな」

〈片類〉のル・ガンは、新しく同僚となったクオンをそう評した。冒険商人上がりの彼にどこまでできるのかドラクウも心配していたのだが、どうやら要らぬ心配だったようだ。

「右！」

クオンが号令をかけると、駆け足で進んでいた歩兵が向きを変える。近隣の村々から集まってきた若者たちだ。

魔王ベナンの頃より、それが簡単という理由から、出身の村単位で部隊を編制することが常だった。だが、クオンはそれに反対した。弓なら弓、槍なら槍と、扱う武器によって部隊を分けるべきだと言っているのである。

なるほど道理であると、訓練の総責任者であるル・ガンが彼の提案を受け入れ、新しい編制での訓練が今、行われているところだった。

「良い工夫だな」

ル・ガンが声をかけると、クオンが頷いた。

「人の軍の真似事です」

「人の軍？ ああ、クオン殿は『渡河者』であつたか」

「殿などと。クオンで結構です」

「ふむ、ではクオン。この軍で、どこまで戦えると思う」

「実戦の経験が足りません。儂はバルミナヤリ・グダンの軍とは見えておりませんが、まだまだこの程度ではもの役には立ちますまじ」

「そうか。では……人族の軍相手ではどうであろうか」

「人族の軍相手であれば、良い勝負ができるでしょう。奴らは数こそ多いが兵一人一人の膂力（りよりよぐ）で言えば、我らが勝る。甘く見るのは禁物ですが、我らの兵二人で人間の兵三人に当たると見て問題はないでしょう。ここで訓練している二〇〇〇の兵は、人族の兵で言えば三〇〇〇に匹敵する、ということですよ」

「なるほど。それは頼もしいな」

以前ラ・バナンに見せてもらった古い書物にも同じようなことが書かれていたのを、ル・ガンは思い出していた。

魔族と人族では、持って生まれた力が違う。訓練された軍であれば、二対三でも魔族が押し勝つ。渡河して実際に人族と接したことがあるクオンの目から見ても、そういうものであるらしい。

「しかし、何ゆえ人との戦など考えられます？ 儂らの敵は、バルミナであり、リ・グダンであり

ましように」

「ん、まあ、それは、な。秘事よ」

ル・ガンは、ドラクウから人界への侵攻の可否を検討させられていた。

どういう意図があるのかは、分からない。分からないが、武人として心が躍りもする。ここにいる二〇〇〇の兵でも、目的さえはつきりしていれば、やってのけられるのではないかという自信がある。

敵が予想さえしていない奇襲。華々しい戦果。それは、武人であれば一度は夢見る勲績ではないか。

仕える主を替えたル・ガンは、言わば裏切り者だ。しかも、もう若くはない。こんな境遇のル・ガンに大役が与えられるのは、これが最後かもしれないのだ。そう思うと、ル・ガンは気持ちが悪るのを抑えきれなくなりそうになる。

「左！」

クオンの号令に従い、兵がまた向きを変える。若者たちの動きは素早く活き活きしていた。その光景が眩しくも遠く感じられる。

ドラクウに人界への攻勢は可能であると報告することをル・ガンは決めた。あまり無茶なものではない限り、十分に目的を達成できる力が兵たちには備わっている。クオンの元でもう少し訓練を積めば、ドラクウの麾下としてどこへ出しても恥ずかしくない練度に仕上がるだろう。

そして、ル・ガン自身は従軍の希望を出すべきか、出さざるべきか。老骨の降将が行くよりも、

タイバンカやルクシユナのような若い将が行くべきだとも思う。

空を見上げ、ル・ガンは目を細めた。

空は、高い。

失った片頬が痛む。陽の光の中を、鳶が一羽、舞っている。それを見て、彼は悟った。

あの鳶は、人界へも自由に行けるだろう。羨ましいが、ああはなれない。アルナハに、残ろう。そう決めてしまうと、不思議と清々しい気持ちになった。

## ▽▽▽【魔王】

邪神殿への訪問は、あえて夜半にした。

月のない晩だ。目立たぬように、ドラクウは僅かな近習だけを連れ、徒歩で邪神殿にやってきた。最近では政務が忙しく、あまり邪神殿の方には顔を出せていない。信仰が薄れたというわけではなかった。むしろ、以前よりも強い繋がりを感じてさえいる。

あの敗戦で、何かがすつきりした。

リ・グダンとのあの戦いは痛み分けた、と言う者もいる。確かにドラクウは勝てなかったが、リ・グダンもまた勝利者とは言えない。しかし、ドラクウの中では完全に敗北だった。敗北でなければならぬ。あの負けを直視しなければ、ドラクウは先に進めないのだ。



邪神殿の扉は、夜でも開いている。

むしろ、夜の参詣者が多い。魔界における邪神の信仰とはそういうものだ。日々の営みから離れ、祈りを捧げる。その内容はほとんどが現世利益であり、目先のことだ。富と名声、不老と長命。戦功を挙げ、懸想した相手を手に入れる。それらは、とても身近で分かりやすい願いだ。

静かに拝む者、熱心に崇める者。それらをすり抜け、ドラクウは祭壇脇の通路から奥に入った。一般の信徒は入れない、邪神殿の中核だ。中では邪神官たちが経文を洗皮紙に書き写したり、祝詞を上げたりしている。

「エリイナはいるか」

「義兄上、いらつしやると仰っていただければお迎えに上がりましたのに」

「いや、構わん。目立ちたくなかったのでな」

エリイナの顔は、疲労の色が濃い。

邪神官長としての仕事の他にも、彼女にはしてもらわなければならないことがある。今はまだ形をなしていないが、その研究ははずれドラクウを大きく助けてくれるはずだった。

「それで、本日は」

「ああ、邪神様に用があつてな」

人を通じて邪神殿に言伝するだけでは済まない用だ。ドラクウ自身が、邪神ヒラノに伝えなければならぬ。そういう種類の用事だった。

気持ちの問題だけではない。先日雇い入れたダークエルフのシュノンによれば、既にアルナハに

は多くの「シェイプシフター」が入り込んでいるという。無論、パザンを支配する「淫妖姫」パルミナの手の者だ。あの種族は、自由に姿を変える。その能力は潜入工作に打ってつけた。

見つけ次第排除しているとシュノンが言うが、油断はできない。大魔王の「耳」であるダークエルフと長きにわたり魔界の暗部で戦い続けてきたのが、シェイプシフターなのだ。ダークエルフの裏をかかないとも限らない。

「ヒラノ様でしたら、この奥に」

「ふむ。奥方……ではない。ヨシナガ様も？」

「いいえ。女神様は、今はおられないようです」

常に顕現しているヒラノと異なり、女神ヨシナガと邪神エドワード、それに客人神オイレンシュピーゲルは姿を隠したままだ。それが当たり前なのだが、ヒラノが顕現しているせいで、どうも不思議な気がしてしまう。

邪神官として神に関わるエリイナは、気配でどの神がいるのか分かるようになったというが、ドラクウには、ヒラノのことしか分からない。

「ん、ドラクウ、来ていたのか」

そのヒラノが、現れた。

努めて声の調子を明るく保とうとしているようだが、表情に影がある。ヨシナガとの口論に疲れたのかも知れない。

「ご尊顔を拝し、恐悦至極に存じます」

「堅苦しい挨拶はよい。それよりも、酒だ。今日はゆっくりしていけるのだろうか？ 政の話なども聞かせてくれ」  
ドラクウが頷く。

この邪神は、政治の話を好む。それも大きな話ではなく、細かな工夫の話だ。珍しいと思う。いや、実際に珍しいかどうかは分からないが、ドラクウの思う邪神とは、そういう存在ではない。戦を好み、血を啜るような神だ。例えば、先だつて戦った邪神オクリなどは、ドラクウの思う通りだった。

「ヒラノ様。本日は、大切な話が」

「大切な話か」

「はい。その話をする前に、お伺いしたい。ヒラノ様は、人界をどう思いますか」

ヒラノが腕を組み、目を閉じる。

ヒラノと女神ヨシナガの最近の不仲の原因は、そこにあつた。ヨシナガは人界への侵攻を主張し、ヒラノが押し止めている。ドラクウはあえて、そこに斬り込んでみせた。

「どうとも思わない。我は人界について、詳しく知らぬ」

「邪神にも、知らぬことがありますか」

「知らぬことばかりだな」

邪神が、自嘲気味に笑う。こういう表情を見ると、まるでその辺りにいる魔族の若者と話しているような錯覚に陥る。ヒラノという邪神はそれほど身近で、親しみやすい。だからこそ、たまに隙

を突いてみたくもなる。

「そうですね。例えば、女心なども？」

「——ドラクウ、お主」

軽口ではない。視線は、真っ直ぐヒラノを捉えている。

「ヒラノ様。私の軍は、人界を攻めます」

「……ならん。どういうつもりかは知らんが、そんなことは許されん」

ヒラノの表情が、改まった。威厳に満ちていると言いがたいが、その眼光はドラクウの目を射抜くようだ。余程の苦境を潜り抜けてきた者でなければ、この凄味は出せない。

「何故ですか、ヒラノ様」

「我は、お主を助けると誓った。お主と肩を並べて、戦うと」

「はい。ありがたきお言葉です」

「ならば、何故！」

ヒラノから受けた恩に報いるため、ではない。

最初にそういう想いがあつたことは確かだが、考えを煮詰めるうちに、確信が生まれたのだ。人界を攻めることは、ドラクウにとつて益になる。

「アルナハは、孤立しております」

「うむ？」

「南に〈堅き者〉の後ろ盾を得たとはいえ、今の力は単なる一魔王のそれに過ぎません」

「そうだな。群雄の一人、と言ったところか」

群雄という言葉でさえ、まだ買いかぶりだ。地方に覇を唱えるだけの戦力すら、ドラクウは有していない。かき集めて四〇〇〇の兵力では、覇を唱えるのに力不足も甚だしい。

「この状況を打破する方法を、私は探らねばなりません」

「それが、人界か？」

「ある意味においては、そうです」

アルナハを中心に見ると、西に人界、南に〈堅き者〉、東にリザードマン、そして北に〈淫妖姫〉、パルミナがいる。賊に墮ちたり・グダンは、パルミナの領土とドラクウの領土の間で略奪を続けていた。

「東のリザードマンは、好戦的で閉鎖的です。あそこに手を付けるのは、後回しにしなければなりません。かと言って、北には進みたい」

「パルミナだけでなく、リ・グダンも相手にしなければならぬからか」

「そうです。あの二人、今は反目しているように見えますが、何らかのきっかけで同盟を組むことも大いに有り得ます。むしろ既に手を組んでいると考えて動いた方がよいでしょう」

「それだけか？ 北にも東にも進みたいという消極的な理由だけで、情報の乏しい西の人界へ兵を出すのか？」

「いいえ、違います。富です」

「渡河者」と呼ばれる冒険商人は、後を絶たない。

危険があつても、利益があるからだ。魔界と人界では産品が異なり、それらを融通することで、莫大な益が上げられる。だからこそ、いくら危険であっても「渡河者」はいなくなならない。

「渡河者」の真似事を、私たちは城市全体でやるうと思つたのです」

「人界との交易、か」

「そのための拠点を得たい。いや、拠点でなくても良いのです。人界側で、我らと取引をする相手となる者さえ見つけられれば、それで構わない」

「そのために、攻めるか」  
当然、練兵のためでもある。

実戦を経験した兵は、強い。リ・グダンとパルミナを相手にするのに、今の戦力では心許ない。

「今、アルナハの軍は四〇〇〇。内、二〇〇〇を人界に送ります」

「全戦力の半分か」

「逆に言えば、それだけの戦力を派遣しなければ、効果は薄いでしょう」

魔軍が侵攻する。

南方では、実に一〇〇年ぶりの事件だ。魔界の西北部では、〈北の霸王〉の軍勢がしばしば人界への侵入を繰り返しているが、それ以外の地域では人界と魔界は概ね平和を保ってきたのだ。

「本気、なのだな」

「はい。戯言で申し上げることができるとは、アルナハの現状は楽観できません」

パルミナが南下すれば。リ・グダンが暴れ出せば。そして、〈北の霸王〉がドラクウ追討軍を出

せば。

考えれば、きりがない。だからこそ、今のうちにできることをするのだ。

「分かった、ドラクウ。賛同しよう」

「賛同してただけて、光栄です」

その機を見計らったように酒と器が持ち込まれる。エリイナの手配だ。

「ドラクウ、今宵は我も飲むぞ」

「はい、お相伴させていただきます」

肴も次々と運ばれてくるが、誰も騒いだりはしない。それは、とても静かでささやかな宴だった。

邪神は、気さくにも邪神官たちに酌をして回っている。

「ドラクウ、飲め」

「あ、ありがたくちようだいします。が、よろしいのですか？」

「邪神の酌で酒が飲める機会など滅多にないぞ？ 気にせずに飲め」

邪神と魔族が同じ席で酒を酌み交わす。不思議な光景だ。こうしていると、邪神と魔族の垣根は

意外に低いのではないかとさえ錯覚してしまう。

酒を飲みながら、ドラクウはヒラノの顔を見た。

安堵と不安が混ざった表情、と言ったところだろう。それでも、安堵の方が勝っている。

こういう邪神と魔族の関わり方もまた、あつていい。

### ▼▼▼【邪神】

俺は苛立っていた。

いや、怒っていると言った方が正しい。原因は、目の前の机に広げられている。

「慶永さん」

「……何、マスター？」

「これは、何ですか？」

「何って、地図だけど……」

地図。そう、地図だ。問題は、これがどこの地図かということだ。

ドラクウが城に戻った後、入れ違いに慶永さんが帰ってきた。人界に侵攻すると伝えたら、彼女がどこからともなく引つ張り出してきたのが、この地図だった。

「どうして、慶永さんがワーボルトの詳細な地図を持ってるんですか？」

「え、えーっと……そこで、拾った？」

「そんなわきやないでしょう。一体、どこのどいつがアルナハの邪神殿に人界の地図なんか落とすんですか！」

「いや、その、えへへ」

頭をかきながら視線を逸らす慶永さんを、俺は睨みつける。

こういう態度を取る時の慶永さんは、大抵とんでもないことを隠しているのだ。  
「笑って誤魔化そうとしても無駄です」

「ちよっと、ヒラボン、じゃなくて、マスター怖い」

「今日という今日は、しっかり説明してもらいますからね。大体、オイレンシユピーゲルが来てからの慶永さんは変ですよ。何でそこまで人界に拘るんですか。『聖堂』に何か恨みでもあるんですか？」

一気に捲し立ててから、しまったと後悔する。

これまで仲間外れにされていた鬱憤が爆発してしまった。駄目だ。こんなにきつく言うつもりじゃなかったのに。

それでも、慶永さんは何かを覚悟したような表情になった。

「——分かった。確かに、ヒラボンにもすっかり聞いてもらった方がいいと思う」

そう言つて、慶永さんはぼつりぼつりと呟くように語り出した。

「私がこつちに転生して、四〇〇年くらいになる」

「四〇〇……年？」

「そう、四〇〇年。……そりゃあ、長かったさ」

この世界と前の世界。

時間の流れは、速いとか遅いではなく、独立して流れているらしい。慶永さんより前に死んだ人が後から転生してくることもあったらしい。

「私はここよりもっと北、人族の小さな部族で崇められる神として転生したんだ」

「例の〈戦女神〉ってやつですか？」

「そう。その部族はしょっちゅう戦争してくせに、戦争がまるで下手でさ。いつも負けちゃうんだ。で、私があればこれ口出ししているうちに、戦いの神として崇められるようになったわけだね」

そう言つて慶永さんは、何かを思い出すように邪神殿の天蓋を見上げた。ただ、そこを見ているわけではなく、その向こうの何かを見つめているようだ。懐かしんでいるだけでなく、どこか寂しそうな表情だった。

「ヒラボンも知つての通り、私はこんな性格だからね。顕現して、部族を鼓舞したり、陣頭指揮を執つたりした」

「俺には、顕現するなつて言うのにな？」

「まあね。私が失敗したからだよ。ヒラボンにも同じ目に遭つて欲しくないさ」

なるほど。慶永さんは、自分自身と俺を重ねていたのか。それなら合点がいく。そうならそうと直接言つてくれればいいのだが、この面倒くささも含めて慶永さんなのだ。

「あの頃は、まだいっぱい神さまがいてね。〈賭博神〉なんかも転生したてで、随分と喧嘩もしたし、怒られもした。顕現したり奇蹟を使つたりする度に会議に呼び出されて、仲間みんなで罰則の徳を払わされてさ」

ん？

今、妙な言葉を聞いた気がする。

「慶永さん、今『まだ』って言いませんでした？」

「……ああ、言ったよ。あの頃は、『まだ』いっぱい神さまがいたんだ。今は神界も随分静かになっちゃったけどね」

「どういうことですか？」

「色々さ。飽きて自分からアガリを選んだ神さまもいるし、神隠しに遭った神さまもいる。でも一番多いのは……〈唯一神〉にやられた神さまだ」

〈唯一神〉。

「聖堂」の神だ。「聖堂」は一神教。それなら、崇めている神は一柱だけ。当然、そうなる。

「ヒラボンも、神界で影が薄くなってしまった神さまを見ただろう？ あの、徳を使い果たした」

「……見ました」

「あれでもまだ良い方で、本当に徳がなくなると、神さまは消滅しちゃうんだ。多分、次の世界に転生するんだろうけどね」

消滅。

その言葉が、重く押し掛かる。

信者を助けると言った俺を、邪神オクリが嗤った理由。神や邪神は、徳を使い果たすと消滅してしまうんだ。俺は賭け碁や何かで徳を得ているけれど、そうでなければ——

「私の部族は、『聖堂』と戦った。一柱しか神を認めない宗教を受け容れることはできないってね。私以外にも色々な神さまを崇めている部族だったから。私は神さまたちを率いて陣頭に立った」

「なんか、慶永さんらしいですね」

「——うん、そうだね。私らしい、かもしれない」

そこで、声が途切れた。

次に出る言葉は、多分決まっているのだろう。

でも、その言葉が喉の奥で詰まっている。そんな風に見えた。

「——私たちはね、負けたんだ。全滅」

俯いた慶永さんの表情は、見えない。

「最後の最後まで諦めずに戦おうって、私が指揮して。皆、戦いなんて苦手なのに、徳を全部振り絞って、どんどん消滅して……」

声に、嗚咽が混じる。

どれだけ辛かったのか、俺には想像できない。仲間が、死ぬ。想像したくない。

「結局、私ともう一人だけが生き残った。私も当然消滅するつもりだった。自分は消えても、部族だけは守り抜く。そう思って、戦った。自慢じゃないけど、私は信望も厚くて、徳もいっぱい集めてたから、かなり持久できた。そしたら」

「そしたら？」

「もう一人生き残っていた女神さまが、『貴女は消えてはいけない』って。そう言って……」

そこからは、言葉にならなかった。俺は、慶永さんにハンカチを渡してそっと席を離れる。

悲しみ。後悔。そして、憎しみ。

オイレンシュピーゲルが「聖堂」の名前を出した時、慶永さんには、かつての自分の姿が重なって見えたんだろう。だから、助けなければならぬと思ってしまった。どんな方法を使っても、俺なら、どうしただろう。俺が逆の立場だったら、慶永さんと同じことをしただろうか。分らない。

ただ一つ、はっきりしたことがある。「聖堂」とは、戦わなければならない。

これは慶永さんのためでもあるし、自分の、つまりはドラクウのためでもある。

河一つ隔てた先で、巨大な勢力が拡大してくるのを見過ごせない。

どういふ結果が出るにせよ、座して待つだけのだけは避けた方がいいと、俺の勘が告げている。

戦う。

もう、これ以上、慶永さんを、悲しませるわけにはいかない。

### ▽▽▽【魔王】

ドラクウは、人界遠征軍の総大将にタイバンカを据えた。

兵力は、二〇〇〇。これに、同盟領である「堅き者」から一〇〇〇の援兵が来る。戦闘力を持たない輸送部隊である小荷駄は、三倍の六〇〇〇を連れていくことになった。

クオンの鍛錬した兵士だ。動きは悪くない。今回の遠征は、その力試しという側面も色濃いのだ。

ドラクウ自身が、行くべきかもしれない。その思いはあったが、アルナハでは彼にしかできない仕事もある。「北の霸王」に敗れ、南に落ち延びた時から付き従ってくれたタイバンカに全て任せることにした。

土地の占領は、目的としない。

人界に拠点を築くことに意味はないし、守り切るだけの力も、今のドラクウにはなかった。保持できない拠点を取つてしまえば、それは足枷と同じだ。タイバンカにもその辺りはしつかりと言いつつ含めてある。

そういう判断もできる將軍に育つて欲しい、という欲目もあった。いま最も不足しているのは、兵でも金でもなく将や官だという焦りがドラクウにはある。

遠征の目的は、人族に畏怖を与えることだ。

方法は、タイバンカと、副将として随行させるルクシュナとクオンに一任する。基本的に破壊や略奪という手段になるだろう。後に統治するつもりであればそういう方法は慎むべきだが、「支配」するだけであれば問題は無い。

統治には慈悲が、支配には恐怖が必要だった。友好を結んで通商を行うという道もあるが、魔族と人族の間でそれほど容易に修好ができると思えない。

アルナハの城壁から、出陣する兵を見送る。邪神ヒラノは、出兵についてどう考えているのだろうか。タイバンカと共に人界へ付いていく、と聞いていた。

「ドラクウ、お主には無理をさせるな」

「いえ、私の言い出したことです、ヒラノ様」  
邪神からの出立の挨拶は、至<sup>いた</sup>つて簡素なものだ。

詳しくは語らないが、神々にも縄張り争いがあるのかもしれない。オイレンシュピーゲルという神が、邪神ヒラノに助けを求めに来たと理解をすれば腑<sup>ふ</sup>に落ちる。

その戦いに、ドラクウを巻き込みたくなかったというのが、ヒラノの意思なのだろうか。であれば。

ヒラノの横顔を、見る。吹っ切れたような、良い目をしている。

「共に歩む」と、この邪神は言った。

それはまさに神話のような話だ。

だがこれは、神話ではない。神にただ助けられることを「共に歩む」とは言わない。そんな道を、ドラクウは歩もうと思っていなかった。

「共に歩む」とは、そういうことではない。

助け、助けられる。

神を助ける、ということ。ドラクウはそれを不遜<sup>ふそん</sup>だと考えなかった。

信者は崇<sup>あが</sup>め奉<sup>たご</sup>り、指し示されるだけという生き方の方が、余程<sup>よほど</sup>邪神に失礼な気がする。

大魔王家が宗廟<sup>そうびやう</sup>に祀<sup>まつ</sup>る神のように、黴<sup>かび</sup>の生えた信仰の形もあるだろう。だが邪神ヒラノとは、与えられるだけの関係になりたくなかった。その思いが、人界遠征を後押ししたのだ。

「魔族が南の蛮王<sup>ばんわうりやう</sup>領から渡河するのは、ここ一〇〇年なかったことです」

ドラクウの言葉に、ヒラノは頷<sup>うなづ</sup>いた。

「相手は油断している、か」

「完全な奇襲になるでしょう。来もしない相手に一〇〇年備え続けることは不可能です。まして、相手はほとんどの魔族より寿命の短い人族ですから」

ただ、北の方では事情が異なる。〈北の霸王〉は、今の地位に就く前からしばしば人界への出兵を繰り返していた。

「……あまり、人族を甘く見るべきではない、と思う」

「甘く見てはおりませんが、不必要に過大評価をすることもまた害悪です」

「彼を知り、己を知れば百戦危うからず、か」

「良い言葉ですね。ヒラノ様の神託ですか」

「……いや、軍神の言葉だ」

「そういう言葉を、もつと教えていただきたいものです」

「機会があれば、な」

小荷駄の最後尾が、城門を出た。

ここから森林を縫<sup>ぬ</sup>うように西進し、渡河する。ほとんどの者にとって未知の土地への遠征だった。

「ドラクウ。我は、人界を見てこよう。まずは、知ることだ」

「そこから始める、ということですか」

「そうだ」



魔界という枠の中だけで戦う。それでは、〈北の覇王〉に勝てない。そのことはドラクウ自身が一番強く感じている。

力だ。

力の量で勝てないのなら、力の種類を変えなければならない。

そのために必要なものが、人界にあると考えていた。

「そろそろ、我也出る」

「邪神にこのようなことを言うのは不遜ですが、ご武運を」

「お主もな、ドラクウ」

言葉が終わるか終わらないかのところで、ヒラノはかき消えるように空中に溶けた。

やはり、邪神なのだ。

親しく言葉を交わしていると、そうではないような気がしてくる。不思議な関係だった。

隊列が西へ消えて見えなくなっても、ドラクウはまだそちらを眺めていた。

大森林は、広く、深い。

そこに、魔族の日々の営みが見える。近くの村から上る炭焼きの煙を見ると、不意に強い風

が吹いた。珍しいことだ。この季節にはあまり吹かない、北からの風だった。

「おお、ドラクウ様。こちらにお出ででしたか」

「なんだ、ル・ガンか。珍しいな。今回は練兵はいいのか」

アルナハの魔王、ゴプリン属のベナンを裏切ってドラクウに帰順した〈片頬〉のル・ガンは、今

回の遠征では留守居組だ。

「実はドラクウ様に内々にお見せしたいものがございまして」

「何だ？」

ル・ガンが取りだしたのは、洗皮紙に書かれた手紙だった。

しっかりとした封蝋は、ゴプリン属の上位のものにしか使えない印である。

「読むぞ」

「はい」

封を切り、文を目で追う。

内容が、頭に入つてこない。

二回、三回と読み直して、漸く内容が理解できた。いや、理解はしていたのだ。あまりに荒唐無稽な内容が、納得することを妨げていたのだ。

「……ル・ガン。この内容、まだ誰にも話してないだろうな」

「無論でございます。ただ、アルナハにいるゴプリン属の主だった者にも、同じ内容の封書が届けられている気配があります。朝から様子のおかしい者が何人もおりましたので、人手を出して調べさせました」

「ラ・バナンにも、か」

「御意にございます」

もう一度、ドラクウは手紙に視線を落とす。そこには持って回った文章で、先代大魔王の遺勅

が見つかった」と書かれている。

遺勅とは、崩御した大魔王が死の前に出していた勅のことだ。今更新たに見つかるはずがない。ところが、そんなものが出回っている。細かなものも含めれば、かなりの数に上るといふ。今、ドラクウの手にあるのも、その一つである。

これらは偽勅、つまり偽物だ。

勅でなければ定められぬことを、好き勝手に行う者がいる。

おそらく、大半が〈北の霸王〉ザーディシユによるものだろう。偽勅を出せるほどの力を持つ者は、そういない。これも、間違いなく彼の仕業に違いない。

〈皇太子〉でも、〈北の霸王〉でも、自分の名で出せば良いことなのだ。それを、先代の名を騙って行うことにドラクウは怒りを覚える。

そして、その内容も問題だった。

「ゴブリン属の長者である魔王ベナンを、〈南の蛮王〉に親任する」とあります」

「だが、ベナンは死んだ」

「現在は、甥のリ・グダンが魔王としてのベナンの跡を継いだ恰好になっております」

「それを言うなら、我が軍のラ・バナンの方にこそ継承権がある」

「〈南の蛮王〉は、南方二十四魔王を統べる立場。恐れながら、ドラクウ様の臣下という立場では」

「ああ、そうだな」

この遺勅は、実のところ何の効力もない。これが見つかったからと言って、生前に遡ってベナ

ンが〈南の蛮王〉に就けるわけでも、ましてやり・グダンやラ・バナンがそれを継承できるというわけではないのだ。そこまで織り込んで、この偽勅は作られている。

問題は、今後にある。

恐らくすぐにでもリ・グダンは、この偽勅を根拠に〈南の蛮王〉を僭称するだろう。

そうなった時、これまで様子見を決め込んでいた小豪族たちはどう動くのか。まるで予想が付かない。ドラクウに付くか、リ・グダンに付くか。日和見を決め込む者もいるだろう。しかし、確実に南は荒れる。

洗皮紙を握る手に、自然と汗が滲む。

タイバンカも、ルクシユナもない。持ち得る力だけで、この苦境を乗り切らなければならない。だが、遠征軍を呼び戻そうという考えだけは、何故か浮かばなかった。

## ▼▼▼【邪神】

遠征軍の隊列から、少し距離を置いた。

そこではオイレンシュピーゲルが、暢気に口笛を吹いている。

舗装もされていない街道は、行軍に適していないようで、隊列の歩みはゆっくりだ。

「オイレンシュピーゲル」

俺が声を掛けると、少年神は笑顔を向けてきた。最初にアルナハに連れてきた時の陰気な表情は、同情を引くための演技だったわけだ。今は、人好きのする笑みを浮かべている。でも、この表情はどこか覚えがある。

「ヒラノさん、ありがとうございます。これだけの大軍を」

「俺が出したんじゃない。ドラクウの軍だ」

「ドラクウはヒラノさんの信者ですよ。それなら、ヒラノさんの軍隊と言ってもいいじゃないですか。凄いですよ、こんなに短期間で」

ドラクウを呼び捨てにされたことに、少し腹が立つ。

もちろん、神が神でない者を呼ぶのだから間違っではないのだろう。それでも、何か大切なものを土足で踏みにじられたような、そんな居心地の悪さがある。

「それで、オイレンシュピーゲル。この軍でワーボルトに攻め込むわけだが」

「ティル、正しいですよ。ティル・オイレンシュピーゲルが正しい名前です」

「ああ、ティル。この軍でワーボルトに攻め込んで、一体どんな意味がある？」

慶永さんのいないところで、聞いておきたかった。自分の境遇と重ね合わせ過ぎていて慶永さんにとって、彼の言葉は全て正しく聞こえているのか、すぐに口を挟んできて、まともな話し合いにならないからだ。

「神罰」ですよ」

「神罰」ね。魔軍が攻め込むことが本当に、神罰になると？」

「ええ、この上もない神罰です」

そう言っただけでオイレンシュピーゲルは、屈託のない笑みを浮かべた。

「聖堂なんていう余所者を信じたらどうなるか、はつきりと思わずに知らせないといけないんですよ。一体、自分たちが誰の信者であるか、思い出させてあげなきゃ」

「選ぶ権利は、人の側にあるんじゃないかな」

「……その意見には同意しかねますね。権利と義務は不可分なものであるはず。一体、今まで誰のおかげで平穩に暮らすことができたのか。それを忘れたまま、新しい信仰に乗り換えるなんて僕は許せません」

「死ぬぞ、人が」

「必要悪ですよ。魔軍は、ワーボルトにとって正義の軍となります。古くからの信仰を捨てればどんな悲劇が待っているか。それを思い知らせるきっかけになります」

「正義の軍なんてない」

「ワーボルトの神々にとっては、間違はなく正義の軍ですよ」

なるほど、呑み込めてきた。

コイツと俺では、信者に対する考え方が全く違うんだ。

「神罰」がくだれば、ワーボルトの「戦士の一族」も少しは頭が冷えるでしょう」

「……魔軍になど頼らず、自分で「神罰」をくだせばいい」

「やってみましたよ、色々とね。でも駄目でした」

「やってみた？」

「早魘、集中豪雨、疫病、地盤沈下、家畜の大量死、くらいですか。でも駄目ですね。もっとはつきり、神罰」と分かる迫力のあるものじゃないと。逆に、聖堂に参りに行く信者が出る始末ですだから、魔軍の登場となるわけです」

そりやそうだ、と喉元まで出た言葉を必死に呑み込む。

それだけの天変地異が起れば、誰でも信じる神を変える。それが分かっているのだろうか。自分は神であるから、信仰されて当然と考えているのだろうか。無邪気な子どもに見えるこの神も、相応に歳を経た神のはずだ。それなのに、こんな初歩的なことも分からないのだろうか。

「困っているんですよ、信仰が減って。これ以上信者が減ると、徳収入が厳しくてね。だからみんなで徳を出し合って、〈賭博神〉フォン・マルクント様をお願いした、ということなんです」

吐き気がした。

俺は、道具か。いや、道具ですらない。オイレンシュピーゲルとそのお仲間にとつて、俺はドラクウという道具を使うための手続きの一つに過ぎないのだろう。

目の前にいるこいつのことはどうでもいい。あのマルクントにそう思われているかもしれないことに、腹が立つ。同時に哀しくもある。

こんな仕事、請けるんじゃないかった。自分の迂闊さに涙が出そうになる。

くだらない。本当にくだらない。できることなら、いますぐこのオイレンシュピーゲルを逆さに吊るしてアルナハに帰りたい。

だが、もう軍は動き出している。

ここで動揺していると見られれば、折角軍を出してくれたドラクウに申し訳が立たない。

「つまり、この魔軍の出現で、聖堂に対する信仰が揺らげばいい、ということだな」

「さすがはヒラノさん。物分かりがよくて助かります。要するにそういうことですね。聖堂に対する信仰が弱まれば、自然と我らワーボルトの神々への信仰が篤くなる、という計算です。ですから、しっかりとお願いしますよ」

「できることできないことがある」

「大丈夫。八〇〇〇の大軍です。ワーボルトの戦士たちなんて、一捻りですよ」

自分の信者を一捻りなどと言ってしまふ感性が分からない。

それに、ここにいる兵力はたったの二〇〇〇で、残りの六〇〇〇は小荷駄、つまり輸送部隊だ。武装もほとんどないに等しい。そんなことも分からない奴の依頼で動いていることがとてつもなく悔しい。

「今回のことがうまく行ったら、またときどきお願いしますよ。お礼は弾みます。マルクント様を通さなくていい分、それなりの徳をお渡しできるはずですよ」

ドラクウは、お前たちの番犬ではない。

怒鳴りたい気持ちを抑えて、俺は曖昧な微笑みを浮かべる。今はただ、一刻も早くこの戦いを終わらせたい。オイレンシュピーゲルの思い通りに動くのは癪だが。

それに、人界にドラクウの影響を及ぼすことも、聖堂と戦うことも、今の俺がやらなければ

立ち読みサンプル  
はここまで

ならないことではある。ここで無意味に争っても仕方がない。

「そういう話は、勝ってからだ」

「勝ちますよ。簡単に」

そんなわけがあるか。横を進んでいく隊列を見る。

この軍を、無事に帰さないといけない。そのことに注力すべきだ。

こんな奴のために、血が流れるべきではない。心の底から思った。

▽▽▽【魔王】

リ・グダンは待つていた。

元は城市の代官の私邸だった屋敷の一室で、脇にはカルティアだけを伴っている。

大魔王府から、使者が来るといふ。実際は〈北の霸王〉の手の者だろうが、今ではその両者を分けて考える意味があまりないと、彼は思っている。

奇妙な遺勅については、既にリ・グダンの手元にも届いていた。

亡き伯父ベナンを〈南の蛮王〉に、という話はいかにもありそうなことではあるが、それ自体はどうでもいい。この遺勅が、リ・グダン自身にどのような影響をもたらすのか。それだけが気になる。

〈南の蛮王〉と言えば、大魔王の下で四天王と呼ばれる立場だった。〈北の霸王〉、〈東の冥王〉、〈西の獣王〉と並ぶ頭職だ。そんなものに、自分が就くことはあるだろうか。

遡って生前の伯父ベナンに〈南の蛮王〉が贈られることになれば、その正統な後継であるリ・グダンが蛮王を名乗ることも、これまでの魔界のあり方から言えば許される。

要するに、この「遺勅」と名前の付いた「偽勅」を、どれだけの者が信じるかという問題だ。信じるという言い方も、適切ではない。信じた方が得をするか、と言うべきだろう。

つまり、この「遺勅」はリ・グダンの値段を計る試金石なのだ。

「正式な魔王ですらないのだがな」

「しかし、一人で立つておられます。ラ・バナンのとは違って」

呟きに、カルティアが返す。

意識からあえて排除していたが、ラ・バナンの問題はある。能力はともかく、血で言えば伯父の子であるラ・バナンの正統だった。

だが、ラ・バナンのドラクウの部将として振る舞っていた。この差は、大きい。

リ・グダンは独立しており、上には大魔王しかいない。そういう立場の人間こそが、四天王に列せられるべきだ。

とはいえ、本当に一人で立っていると胸を張れる立場に自分があるのだろうか。

ドラクウと引き分けてから、リ・グダンは残兵を糾合して手近な城市を襲った。カタニアという城市だ。今はそこを支配している。いや、まともな城市の形をなしていないので、根城にしてい